



たねや・クラブハリエ 自然の恵みから美味しいお菓子を



クラブハリエのバウムクーヘン

紙ストローは高コスト

たねやグループでは脱プラに向けた取り組みを行っている。紙ストロー1本当たりのコストはプラスチック製ストローの約15本分。環境にいいものを導入するとなるとそれだけのコストがかかる。買い手よし・世間よしだけでは会社は成り立たない。

水森さんは「今の世の中は、気候変動、食品ロス、海洋プラスチック等さまざまな問題を抱えている。私たちが変えていかなければ、私たち、あるいは、その次の世代の人たちが地球に住めなくなってしまう」と語る。

これまで当たり前前に提供していたストローをやめ、必要なお客様のみに提供するシステムにする。複数枚入れていたお菓子の説明葉を、QRコード導入により1枚に減らす。こしあんを作る際に無駄になっていた小豆の皮をパウダー状に加工してお菓子の素材とする。

こうした工夫と努力により、たねやは『三方よし』を実現しているのだ。

取材先

たねやグループ

和菓子・洋菓子の製造販売、喫茶・食事の提供を行っている。滋賀県近江八幡市に本社を構え、関東から近畿、九州までの各地で事業を展開している。



自然があってこそのお菓子づくり

滋賀県で絶大な知名度と人気を誇るお菓子メーカーたねやグループ。たねやグループはお菓子づくりを通して滋賀・近江に伝わる伝統を守り、伝え、そして発展させている。内閣府を始めとし、様々なところで評価されている企業活動は近江に伝わる『三方よし（売り手よし・買い手よし・世間よし）』の理念に基づいている。「自然があるからいい素材ができる。また、お菓子のみなもとである素材を大切にすることで、お客様に安全かつ美味しくお菓子を食べただけ。自然があってこそのお菓子づくりなんです」と営業部の水森さんは話す。近江商人の商魂『三方よし』を受け継ぐ企業の姿勢そのものだ。近江の伝統的な風土・精神を守りながら持続的発展を可能にするたねやグループは『12: つくる責任・つかう責任』を含むSDGsの様々なゴールを結果的に実現していると言える。

懐かしいけど新しいたいまつフェス

近江の風土・伝統の良い例として「ヨシ刈り」がある。ヨシは琵琶湖に生息する植物で、3メートルほどの大きさになり群生する。水を綺麗にする植物であるが、ひとが刈り取りをしなければヨシの原は荒れてしまう。それゆえ、近江では伝統的に「ヨシ刈り」が行われてきた。冬に枯れたヨシは刈り取られ、たねやグループが主催する「たいまつフェス」で多くの個人的なたいまつに姿を変える。12月初旬に行われるこの祭りは風土の保全・文化の伝承を実現しつつ、人のつながりを生み出している。



たいまつフェス

取材者

滋賀大学 経済学部 4回生

鈴木茂生

立命館大学 経済学部 1回生

山中里奈